



Upside Japan  
THE TECH INSIDER www.upsidejapan.com

！ホーム！UPSIDEについて！UpsideToday米国版！

！コラム！ビジネスモデル！注目の企業！キーパーソン！業界動向！アジア最新ニュース！ITな暮らし！



Upside Japan / コラム



## 山田くんの仕事と私の仕事 中村伊知哉@LANTIC【第13回】

1999年12月9日

浅田彰といしいひさいちとつげ義春

### 注目記事

- ・MSNが音楽配信サービスに参入!
- ・ネットのコンテンツで金は取れるのか?
- ・マイクロソフトがトランスメタと提携!
- ・iモードがアメリカにやってくる!

- ・ハイテク株よ、底の底まで落ちてくれ
- ・略語の山に埋もれたB2Bマーケット



デジタル用語辞典:

検索



'79年4月、大学の入学式に出なかった、さしたる信念があったわけじゃなくて、面倒くさかったのだ、メンドくさい、これは強い理由である、時間がないとか意味がないとかいう理由は、時間ならあるだろうとか意味はこうだという反論を招くが、メンドくさいと言われるとどうだ反論できまい、

でも大学には出向いたので正門に行くところと兄ちゃんが独りでピラを配ってる、新入生が読むべき本、聴くべき音楽、観るべき映画、つてのがリストになってる、それがとてもすごいリストで、大学生ってのはこんな深い勉強をするのか、ボクについていけるだろうかとにわかに不安になったが、それを書いて刷って配って兄ちゃんが院の一回生で浅田彰というすごい人だということはそれから随分あとになって知った、

その日それからボクは河原町三条の喫茶店にマンガ一冊もって入った、いしいひさいち『がんばれ!!タブチくん!!』の単行本だ、むかし夜行というマイナーな不定期マンガ誌があって、高校2年生のとき、つげ義春・つげ忠男兄弟がその第7号に寄稿していたから買ってみると、いしい被災地という作者が不思議な4コマを描いていて、絵がうまいなあと思ってそれから注目していたけれど、受験でマンガから離れていたの久しぶりのいしいひさいちだ、それがおもしろくておかしくて声が出てとまらず、カッコ悪いから喫茶店の机の下に潜ってオウオウ笑っていると、斜め後ろの母娘とおぼしき二人が「マンガであんな笑うてアノ人あほやわ」とささやくのが聞こえ、あーボクはアホやアホでよかったとそのとき思った。

いしい氏の登場は新鮮だった。従来4コマ目に来るオチを3コマ目に持ってきて、4コマ目で再転換して異界を現わす手法が斬新だった。加藤芳郎や谷岡ヤスジといった天才が切り崩したナンセンスマンガを革命的に壊す天才だと思った。'70年代後半のいしいひさいち、'80年代前半のビートたけし、'90年代のダウタウンのおかげで、日本の笑いは他国にマネのできない高みに進化した。

マンガは手塚というダイナミックな表現と、つげ兄弟に代表される静的な表現とが二つの太い柱となり、少女系やギャグ系が厚みを与えて進化してきた。大人も子供もいっしょけんめいマンガを読む、その読み手のレベルの高さに裏打ちされて、他国にマネのできない表現の高みに進化した。天才が世の中を切り拓く。オーディエンスの質と厚みとその前提となる。音楽も文学も、料理だって政治だって何だってそうだ。

浅田彰:文学部の名物教授である森毅氏の授業に顔を出しては、他人の発表を片っ端からコキおろしていたらしい。京大卒業は'79年、ちょうど中村氏と入れ替わりである。

がんばれ!!タブチくん!!:いしい氏もよもや、タブチくんがダイエー(南海というべきか)の監督になるとは思ってもいなかっただろう。そのタブチくんとホームラン王を競ったチャーリー・マニエル(当時近鉄)は、いまやクリーブランド・インディアンスの監督である。

夜行:'72年創刊のマンガ雑誌、発売元は北冬書房。『ガロ』で知られる青林堂を'71年に退社した高野慎三が、年1冊ほどのペースで20年以上にわたって発刊しつづけている。創刊号にはつげ義春、つげ忠男、林静一、古川益三らの作品を掲載。ちなみに“やこう”ではなく“やぎょう”と読む。

大人も子供も:日本に滞在する外国人はよく、「日本人は大人でも電車の中でコミックを読んでいる」と批判する。だがそれは、彼ら(彼女ら)の国が貧困なマンガ文化しか持たないという証明に過ぎない。大人が読むに堪えるマンガがないことは、不幸なことである。

### 『となりの山田くん』は天才のフルスイング

『ホーケキョとなりの山田くん』を封切りの日に観るために帰国した。高畑勲監督もよくこんな映画つくったもんだ。ファンタジーより現実のリアリティーを表現したい気持ちはよくわかる。

スコスコの水彩画面を作るために、もののけ姫を上回る作画枚数を費やす意味もよくわかる。CGなんていうテクノロジーはこういう具合に従えるべきものだっていう作家の気合いもよくわかる。

でもホントにそれをフルスイングでやっちゃう根性ってのは、理解を超える。天才ってのは強烈なパワーが備わったアホのことを言うんだな。

作品が浮揚感で統一されているのは、人類の宝・矢野顕子さんの音楽の力だ。この作品の音を作れる人はこの方しかない。河原町三条のテーブルの下でオウオウ笑ってからしばらくたって、私は坂本龍一さんにあこがれて、音を出すことに熱中して、その世界に人生を捧げようかとも思ったが、矢野顕子さんの音に打ちのめされて、やっぱこういうのは天才がやらなきゃダメだと悟り、断念して、役人になった。いや私のことはどうでもいい。天才が大切なのだ。

よくこんな映画つくったもんだ、と唸るのにはもう一つ理由がある。マンガをアニメにするというのは、絶対に失敗する運命にあるからだ。マンガとアニメは根本的に違うメディアだから。マンガはとても柔軟な表現手段で、コマの大きさ、フキダシを含めた画像構成は作家の自由だ。ページをめくって読み進むタイミングは読者に委ねられる。聞こえてくる音の解釈も読者に委ねられる。

しかしアニメは、定まった大きさのスクリーンに、定まった時間進行のもとで、音も含めて、作家が全てのイメージを描き切らなくてはいけない。マンガの読者に許される解釈やスピード感の自由は、アニメでは奪われる。だから、オーディエンスにとって、マンガとアニメの味には必ずズレが出る。アニメのテクノロジーが進化するほどズレは際だつ。

小説を映画にするのも同じ。たいてい失敗している。あたりまえのことだ。表現手段を変える難しさ、メディアを転換するのに必要なイメージの重さ、を乗り越えるほど強烈なオリジナリティーを持ってこない、原作に匹敵する作品はできない。

## 作家性あふれる、現在の日本アニメ

インターネットでの新しい表現を模索しているアーティストも多い。が、マンガやアニメなど旧来型の表現をそのまま載せようとしても失敗するのは目に見えている。リンクやインタラクティブというインターネットの特性を活かしたものでなければ、意味がないからだ。それならマンガやアニメで表現する方がいいのであって、ムリしてインターネットでやろうとするのでは、無自覚な作家のたまり場になってしまう。

これは表現手段としてのインターネットのことであって、作品のデリバリー手段としてインターネットを使うというのとは全く意味が違う、なんてことは言うまでもないのだが、いちおう言うとおかないと、音楽はMP3がブレイクしてどうか詰め寄り人がいるのでイヤンなる。

そういう意味ではこの映画はかなり成功している部類だろう。正直いって私にはところどころテンポや音質の点で違和感があったが、スクリーンに表われるニッポンの日常は、私ごときの違和感など遠くにうっちゃってくれるオリジナリティーであった。おやじが酔っぱらってバナナを食うゆっくりしたシーンを、アメリカ人やフランス人や中国人に見せてやりたい。天才たちがぶつかりあって描くのは、こういうことだ。

以前、日本のアニメがやばいと書いたところ、郵政省の若い官僚が日本のアニメをこれならどうだと送ってきてくれた。青の6号、カードキャプターさくら、彼氏彼女の事情、Lain、など15本ばかり。

恐れ入りました。やっぱ日本の方がかなり上だね。美しくやる気のある作品があるねえ。オリジナルだねえ。立派なもんだ。テクノロジーで先行されても、それをどう活かすかという作家性さえしっかりしていれば大丈夫だ。それをどうデリバリーするか、テレビかビデオかDVDか映画かインターネットか、カネ回りをどうするか、そういう産業としての問題に作家が気をもまなくてもいいようにしてあげたい。

MP3: パソコンを使っていない人でも知っている、多分唯一のファイル形式(の名前)。きっと、Real AudioやWave、Quick Timeも全部、MP3だと思われているに違いない。“ファミコン”が家庭用ゲーム機の代名詞になったようなものか?

## デジタル放送の行き先と日本のかたち

となりの山田くんを観る前に、秋葉原で伊藤穰一さんや猪瀬直樹さんと**デジタル放送に関するトークバトル**に出演した。デジタル放送にとって、キレイで大画面なんてのは本質じゃ

ない。多チャンネルも本質じゃない。それはアナログでもできることの改善にすぎない。デジタル放送の意味は、テレビとインターネットの結合だ。センターと家庭とを結ぶ大容量のダウンロード回線が出現するということだ。電子商取引や教育などのダウンロード・チャンネルにすることだ。

だから、一刻も早くやらせて、やりとげて、今テレビで使ってるアナログの電波を明け渡させて、次のステップに進むべきだ。外国企業でもいいから、やりたいヤツにやらせるべきだ。政府も、情報公開し、テレビで税金申告ができるようにし、テレビで大学の単位が取れるようにし、つまり政府自身がコンテンツプロバイダーになれ。

ちょっと過激だったかしら。そんなことないですよ。アメリカでは**大統領選挙**がぼちぼち始まっていて、IT業界を民主党と共和党のどっちが取り込むかが最大関心事になっている。どんなデジタル政策を打ち出すかが争点になる。当然だ。大事なことから。日本はどうなんだ。各党のデジタル政策はどうなんだ。デジタル放送をどうするかでくにかたがた決まるんだから、総裁選はこれを争点にすべきだろう。

ブツブツ言いながら山田くんを観て思った。そんな議論も、山田くんのようなしっかりした映像作品が根底にあってこそ成り立つ。エンタテインメントとしてのテレビはなくなるにせよ、捨ててもいけない。なんてことは言うまでもないのだが、いちおう言うておかないと、じゃあテレビはなくなるのかなどと問いつめる業界の方がいるのでイヤなる。テレビは必要だが、あなたには不要だ。

デジタル放送に関するトークバトル: '99年7月17日に、“AKIBAX '99 インターネットショー in 秋葉原”というイベントのなかで開催されたもの。詳細は[ASCII24のレポート記事](#)を参照されたい。

大統領選挙: ブッシュ元米大統領(当時68)がクリントン米大統領との選挙戦に敗れたのは、8年前のこと。そして、2001年の選挙に勝ったのが、息子のジョージ・W・ブッシュ(53)。なんか計算が合わないような気もするが、オヤジのほうは学生結婚で、大学生の時すでに子持ちだった。

## 何してんねん - - 仕事でんがな

山田くんを観おえて楽屋に戻ると、ドリームキャストの**湯川元専務**がいた。朝まで一緒に飲んでたというのにまた出くわしたね。「何してんねんお前こんなところで」「仕事でんがな」。楽屋には、いとうせいこう氏もいた。湯川さんと次の舞台にご出演。いとう氏は私と**生年月日**が同じなので友達だ。ごぶさた。「何してんのこんなところで」「仕事でんがな」 - -。

そういえば私の仕事って何なのかな。授業はしてないから教師じゃないし、学者ってわけでもないし。流れ者、かな。かっこいい肩書きはないかな。むかし、“ニューな茶のみ環境を考えるハイ・エージメディア対策本部”という郵政省の委員会を作り、いとう氏に本部長に就いてもらった。そのとき、“師”という字のつく職業の人を委員にしたかったんだが、教師、整体師、**庭師**しか任命できなかったの、またこんどそういうの仕掛けようと思う。

医師や美容師は何とかなるだろう。漁師、宣教師、占い師、振付師。うん、見つけれれる。興行師、相場師、彫物師、殺陣師、クギ師、道化師、腹話術師。うむ、イカス。いいなあそんな名前の職業。琵琶師、錬金術師。濃いなあ。まだいるのかなそんな人。色事師。これって職業か。山師。これはタダの悪口か。ペテン師。それって私のこと?

湯川元専務: 高校野球では大阪大会ベスト8というスポーツマン。だからBMWが好きなのか。実はすでに84年に[テレビCM](#)に出演していた。

生年月日が同じ: いとう氏と中村氏は'61年3月19日生まれ。この日は日曜日で仏滅。お2人は五年で魚座、木星人の - でチータだそうです。

庭師: バカボンパパの本職が庭師だって知ってた?

## 中村伊知哉 プロフィール



マサチューセッツ工科大学 客員教授

'61年生、京都市出身。京都大学経済学部卒。

在学中はロックバンド“少年ナイフ”のディレクターで活躍。

'84年、郵政省入省。'93年からパリに駐在し、'95年に帰国後は郵政大臣官房総務課課長補佐を務める。'98年、郵政省を退官し、(株)CSK特別顧問に就任。同年、マサチューセッツ工科大学 客員教授に就任。

著書に『インターネット,自由を我等に』（アスキー出版局）などがある。趣味は、ずばり“メディア”。

ホームページ：<http://www.media.mit.edu/~ichiya/jpn.htm>

(C)Hajime Anzai

▶[中村伊知哉@LANTIC【連載リスト】 \(http://www.upsidejapan.com/upside/column...\)](http://www.upsidejapan.com/upside/column...)

(中村伊知哉)

！ASCII24！ASCII24 Business Center！日刊アスキー Linux！アスキーデジタル用語辞典！  
！auto-ASCII24！Shes.net！ASCII Job Serve.！アスキートップ！

！[個人情報の取扱について](#)！[編集部へのコンタクト\(info@upsidejapan.com\)](mailto:info@upsidejapan.com)！[広告掲載のご案内](#)！

Copyright (C)1993-2000 Upside Media Inc.  
Copyright (C)2000 ASCII Corporation.  
All rights reserved.